

# 海外移住 資料館 だより

Japanese Overseas Migration Museum News No.43

2016  
Autumn

日本人の海外移住は100年以上の歴史があります。

JICA横浜 海外移住資料館では、海外へ移住し、それぞれの国や地域で新しい文明作りに参加してきた日本人移住者の歴史と、その子孫である日系人について広く理解を深めてもらうことを目的に、さまざまな資料を展示しています。

■発行元：JICA横浜 海外移住資料館  
神奈川県横浜市中区新港2-3-1 JICA横浜2階  
Tel:045-663-3257 (代) URL:<http://www.jomm.jp/>

■編集発行人：JICA横浜 海外移住資料館 館長 朝熊由美子

## 鏡像の祖国 —アルゼンチンの日系人たち—

田島さゆり写真展



比嘉アメリア (75歳 二世)  
サンタフェ在住  
*Amelia Higa*

1932年に建築されたカフェを、父から受け継ぎ経営している。カフェの建物は、サンタフェ市の有形文化財に登録されている。戦前のカフェには、男性は正装してやって来たものだと、当時の話を聞かせてくれた。

※田島さゆり写真展より。年齢は2015年撮影当時  
(中面に続く)

## 〈企画展示〉田島さゆり写真展

# 鏡像の祖国—アルゼンチンの日系人たち—

10月15日(土)～12月11日(日)

当資料館では10月15日(土)から12月11日(日)まで、写真家田島さゆりさんが、アルゼンチンに暮らす日系人を撮影したモノクロ写真50点を展示する「田島さゆり写真展 鏡像の祖国—アルゼンチンの日系人たち—」を開催します。オープニングには、田島さんとアルゼンチン出身の日系二世歌手、大城クラウディアさんの「ギャラリートーク&ミニライブ」も行います。

田島さんの写真家としての原点のひとつは、JICAが派遣する青年海外協力隊写真隊員としてブルガリアで活動したことです。その後、シニア海外ボランティア\*としてアルゼンチンに派遣された夫の能地泰規さんに随伴家族として同行し、アルゼンチンに暮らす120人の日系人の写真を撮り続けました。日系人の写真を撮ろうと思ったきっかけや、タイトルに寄せる思いなど、田島さんにお話をうかがいました。

\*開発途上国からの要請に基づき、それに見合った技術・知識・経験を持つ人を派遣するJICA事業で、40～69歳を応募対象としている。

### インタビュー 写真家 田島さゆりさん

#### 写真家になったきっかけは？

小学生の時、ペルーのナスカの地上絵やインカ文明に興味を持ち、ペルーへ行ってみたくて思ったんです。そんな時に、たまたま見つけたのが、青年海外協力隊事務局が発行している月刊誌『クロスロード』のペルー特集号でした。表紙の写真は、青年海外協力隊の写真隊員が撮影したもので、その時、こういう活動でペルーへ行けるんだとぼんやり思ったのがきっかけです。それから、お年玉で半年間、『クロスロード』を定期購読したのですが、ペルーについて掲載されたのはその時の1冊だけでした。

その後、大阪芸術大学の写真学科へ進むことを決意したのですが、大学入試の面接で「将来、何がしたいか？」と質問された時、とっさに「青年海外協力隊の写真隊員として、ボランティア活動をしたい」と答えていました。のちに夢が叶って1997年から2年半、ブルガリアの首都ソフィアにある国立写真印刷専門学校で、14歳から18歳の生徒に写真の基礎を教える活動に携わりました。

#### 日系人の写真を撮ることになったのは？

2004年、夫がシニア海外ボランティア制度でアルゼンチンへ行くことになったので、随伴家族として一緒に渡航しました。夫は小笠原流礼法の師範で、小笠原流茶道古流奥伝の資格を持っています。指導科目は日本文化紹介で、ブエノスアイレス日本庭園に派遣され、日本の作法を紹介したり茶道の講座を開いたりしていました。私も夫と一緒に日系社会での活動に参加するようになり、たくさんの日系人と知り合う中で、日系社会や日系人に興味を持つようになりました。

1年間の滞在中に、ブエノスアイレスを中心に大きな日系社会がある町をまわりはじめ、一世や二世の方々を撮影しました。その後もアルゼンチンには数回渡り、撮影させてもらった方は120人ほどになりました。十人十色といいますが、私が出会った120人もそれぞれ120色の人生があることを感じました。

#### タイトルを「鏡像の祖国」としたのは？

アルゼンチンは、日本と地球上で最も離れていて、季節も時差もすべてが逆転しています。それでも、日系社会や日系人は、日本の古い習慣を忘れることなく作り上げているんです。でも、それは日本ではないし、日本と同じにもならない。左右は反転するけれど、上下はそのまま映る、鏡に映し出された姿を見るようでした。手の届かないところに日本がある。そういう鏡のような世界を感じたのです。



「写真とは記憶する鏡」という言葉がありますが、その言葉を実感した瞬間でした。

#### 日系人の写真から伝えたいことは何でしょう？

異国の地で生活することになった日系人のみなさんの困難は、並大抵のものではなかったはずですが、その苦労は、私たちには想像もできないほどのものだったと思います。それでもみなさん、過去の苦労を笑い話として話してくれました。そしていい笑顔で迎えてくれる。それがすごいことだと思うんです。

モノクロームの写真の中から、日本と最も離れたアルゼンチンに暮らす、彼らの想いを感じていただけたらと思います。

#### ■田島さゆり プロフィール

- |           |  |
|-----------|--|
| 1968年     | 埼玉県生まれ   |
| 1992年     | 大阪芸術大学芸術学部写真学科(有野永霧ゼミ)卒業<br>写真専門学校に勤務した後にフランスへ渡る。<br>南フランスの写真家ルシアン・クレルクに師事         |
| 1997年～00年 | 青年海外協力隊写真隊員としてブルガリアに派遣され、<br>国立写真印刷専門学校に勤務<br>帰国後フリーカメラマン                          |
| 2004年～05年 | シニア海外ボランティアとして派遣された夫の随伴家族として<br>アルゼンチンへ渡る。そこに暮らす日系人の撮影をはじめ。<br>その後もアルゼンチンに住む日系人を撮影 |

#### ■主な写真展

- 1995年『日常—南仏アルルより—』新しい写真家登場入選展 新宿コニカプラザ(東京)
- 1996年『第1回ヤング・ポートフォリオ展』入選展 清里フォトアートミュージアム(山梨)
- 1997年『タタタ ベトナムにて』ギャラリーならや(東京)
- 1998年『田島さゆり写真展』ブルガリア文科省ギャラリー(ブルガリア・ソフィア)
- 2001年『生活の中で続くもの—ブルガリア—』ギャラリー一人(東京)
- 2013年『鏡像の祖国 アルゼンチンの日系人たち』新宿ニコンサロン(東京)
- 『鏡像の祖国 アルゼンチンの日系人たち』大阪ニコンサロン(大阪)

## Sunao Mizutamari



### 水溜侃(70歳 一世) コスキン在住

16歳の時、アルゼンチンに移住。1960年からコスキンに住み食料品店とクリーニング店を営む。同市には結核療養所が古くから有り、墓地には古い日本人名のものがいくつもある。風化が進行しているので、ボランティアで墓守をしている。DNA鑑定で、日本の遺族の元に届けられた遺骨もある。

※田島さゆり写真展より。年齢は2009年撮影当時

アルゼンチンへの戦前の移住者は単身だった者が多く、その中には、異国での過酷な労働環境で結核を患ってしまう者もいました。アルゼンチン中部に位置するコスキン市は高地で気候がよかったため、病気を治すために移り住む、転地療養の場所として有名で、在亜日本人会付属の結核療養所も1936年に開設されました。

結核に倒れ亡くなった人たちの遺骨は、いったんは簡易的に土葬されますが、長い年月の中で、管理されないまま荒れ果て、多くが無縁仏となっていました。

水溜さんは、2012年に73歳で他界するまで、このように無縁仏となった日本人移住者の遺骨を収集し、埋葬記録と照合して故人を特定する活動をボランティアで行っていました。水溜さんの努力が実り、日本に住む家族のもとに届けられた遺骨もあります。また、2001年にはJICAの支援を受けて納骨堂が建設されました。

## Ruben King

### リューベン・キン(79歳 三世) コルドバ在住

アルゼンチンに最初に移住した牧野金藏の孫。金藏は通称であった”キン”を姓としていた。金藏の長男で、リューベンさんの父アルマンド金太郎さんは地質学者だった。リューベンさんは医師として長く働いてきた。画家の叔父(金藏の次男ペドロ)が描いた、祖父の絵とともに撮影した。金藏の墓は、すでにどこにあるか不明だそうで、教会のリストに金藏の名前が残っているのと肖像画のみが、彼が存在した証ということだった。

※田島さゆり写真展より。年齢は2015年撮影当時

アルゼンチンに最初に定住した日本人は、牧野金藏です。彼は1886年からコルドバに住み、鉄道会社で機関車の運転手をして暮らしていました。



## Alberto Buichiro & Ofelia Sanae Tsuji



### 辻アルベルト武一郎(76歳 二世)

### オフィーリア早苗(73歳 二世) ブエノスアイレス在住

大正時代にアルゼンチンに渡った辻氏の父は、日本製陶磁器の輸入とアルゼンチンでの磁器製造で成功を収めた。現在でもアルゼンチンでは、「Tsuji」は磁器をさす言葉として通用する。自宅には当時、日本から職人を呼び寄せて作った茶室がある。

※田島さゆり写真展より。年齢は2005年撮影当時

1921年にアルゼンチンへ移住した武一郎さんの父、辻才次郎氏は辻商會を立ち上げ、日本から輸入した日本製の陶磁器の品質と独特のデザインを売り物にして、ヨーロッパ製の高級陶磁器と競合しながら、中・上流階級を対象に地道に販売市場を開拓していきました。第二次世界大戦により、日本からの輸入が途絶え



ると自社製品の生産に取り組み、1952年に辻陶器会社を創設しました。当資料館の常設展示には、辻陶器会社の設立40周年記念の皿やバラの絵が描かれたティーセットが展示されています。

# Sadako Iida



## 飯田定子(78歳 一世) その家族 ガルアペ在住

定子さんの夫が移住を決意したため、家族そろってミシオネス州に入植。会社員をやめて同行した長男の竜介さんはこの地で結婚した。移住したときに、家族で力を合わせて建てた、思い出のたくさん詰まった旧宅にいまも住んでいる。日本から持ってきた、いまだ現役の1961年製のジープが家族のトレードマーク。

※田島さゆり写真展より。年齢は2005年撮影当時



当資料館の常設展示室の中央には、移住者が海外へ渡る時に持っていった品を展示している「移民の七つ道具」のコーナーがあります。その中に、飯田さんから寄贈いただいた化粧水のビンやおしろいの缶が入ったトランクが展示されています。

# José Kiyoshi Kushinakajyo

## 後仲門ホセ清(75歳 二世) ルハン在住

アルゼンチンのカトリック教会の総本山があるルハンでクリーニング店を営む。1967年にルハンを洪水が襲った際、父の清松さんが、無償で歴史博物館の収蔵物のクリーニングを行い表彰された。このときホセ清さんも作業を分担している。息子のガブリエルさんは、柔術で世界一になったこともある武道家でもある。

※田島さゆり写真展より。年齢は2015年撮影当時



クリーニング業は、まとまった資金がなく言葉が不自由でも出来る仕事で、さらに日本人の手先の器用さに適していたので、初期の頃から日本人移住者に人気の職業でした。そのきめ細やかな仕事ぶりはアルゼンチン社会において信頼を築き、スペイン語で洗濯店を意味する「ティントレリア」という言葉が、日本人の代名詞として使われるほど、日系社会の中心的な職業でした。

## 比嘉さんのカフェ(表紙より続く)

戦前、アルゼンチンには日本人が経営するカフェ(喫茶店)がたくさんありました。その多くは、「カフェ・ハポネス(日本人)」「カフェ東京」「カフェ横浜」など、日本の地名や日本人による店であることを掲げた名前でした。1924年頃、日本人経営のカフェはアルゼンチン全土で60以上あり、珈琲店同業組合が結成されました。

表紙に掲載の比嘉さんのお店は、日系人が経営する歴史のあるカフェとして有名です。お店の名前は「Café Tokio Norte」(カフェ東京北店)。店内にはビリヤード台が置かれ、テーブルやランプシェード、床のタイルの模様など、当時の趣がそのまま残っています。(写真:田島さゆり)

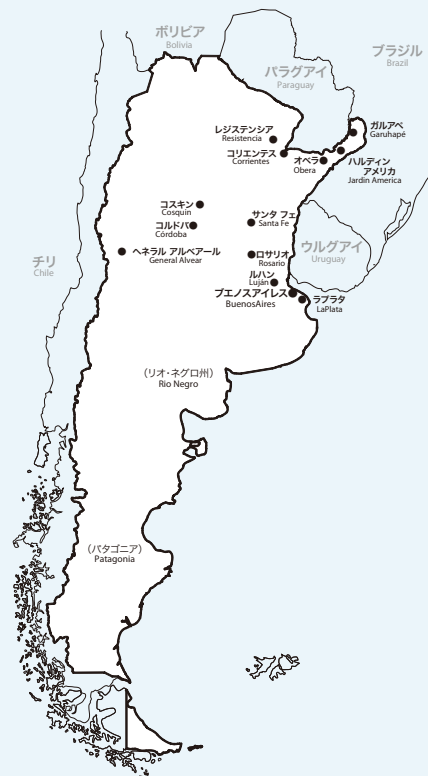


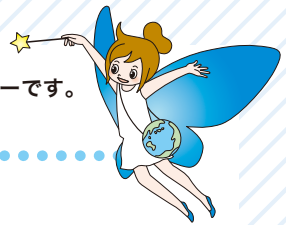
## アルゼンチンへの日本人移住

アルゼンチンへは、戦前、約5,400人が移住しました。その多くは呼び寄せ移民や、ブラジルやペルーなどの近隣諸国からの転住者でした。最初は農園や工場、食堂、洗濯屋の下働きをしていますが、その後独立する者が増え、1940年頃にはクリーニング業や野菜栽培、観賞用の花や観葉植物の栽培を主な職業とする日系人が数多くいました。これは、アルゼンチン日系社会の特徴のひとつです。

戦後の移住は、1948年、沖縄出身者による親族呼び寄せ移民に始まりました。1952年の平和条約締結によって国交が回復すると、両国政府間協定による移住も行われるようになり、戦後は、約12,000人が移住しました。

約7割が沖縄出身者であるということも、アルゼンチン日系社会の大きな特徴です。人口約4,000万人のアルゼンチンにおいて、およそ23,000人の日系人が暮らしています。





## Topic-1

### リオデジャネイロオリンピック 聖火トーチ公開!! 除幕式、特別講演会を開催

リオデジャネイロオリンピックの聖火ランナーとして、7月24日にサンパウロで聖火リレーに参加した日系二世の小川彰夫さんから当資料館に聖火トーチを寄贈いただき、8月12日に除幕式、9月25日に特別講演会を開催しました。

除幕式には、駐日ブラジル大使館からフェルナンド・ベルジガオン経済協力担当部長も出席しました。

小川さんは、日本文化に関する百科事典の機能をもつ「日系ペディア」や、日系団体の活動やイベントを紹介するサイトを運営し、ブラジル社会に日系社会を広く紹介しています。聖火ランナーには、公式協賛社である日産自動車の推薦で選ばれました。

講演会では、日本の文化や日本語を日系人が次の世代に継承していくことの重要性について「自分は日系人であることをとても誇りに思っています。日本の礼儀や良き習慣がブラジル社会に良い影響を与えています」と語りました。講演後、朝熊由美子当資料館館長からトーチ寄贈に対する感謝状が贈られました。



声援にこたえながら力走する小川さん(共同通信社撮影)



トーチを手にする小川さんを囲んで



除幕式に出席したベルジガオン部長(右)と関係者

8月の夏休み中、リオデジャネイロのシンボル「コルコバードのキリスト像」の写真を背景に、トーチを手に記念撮影できるイベントも開催しました。トーチの高さは約70センチで重さは1.4キロ。トーチ上部には一部分黄色く変色したところがあり、聖火がともっていたことを実感できます。撮影会に参加した人たちは「思った以上に重かった」「実際に使われた聖火トーチだと思うとドキドキした」と感想を寄せてくれました。

## Topic-2

### ペルー日本人移民のデータベース Pioneros Ver.2.0開通式

ペルー日本人移民のデータベース「Pioneros」バージョン2.0の開通式が7月26日、ペルー日系人協会ホールへ・クニガミ会長、赤嶺貴子国内外関係部長、慶應義塾大学柳田利夫教授(海外移住資料館学術委員)、海外日系人協会田中克之理事長が出席して行われました。

本データベースは2013年に公開。氏名、出身都道府県、船名、ペルー到着日、配耕地などで検索できる画期的なシステムです。今回、バージョン2.0の開通により、戦前、ペルーに契約移民で渡った18,727人のデータに自由移民で渡った2,348人分のデータが追加され、さらに検索領域が広がりました。

[http://www.jomm.jp/dnp\\_peru/entrance.html](http://www.jomm.jp/dnp_peru/entrance.html)



左から赤嶺部長、クニガミ会長、朝熊館長、柳田教授、田中理事長

## Topic-3

### 大好評!!子どもアドベンチャー 「ミニ資料館を作ろう!」

横浜市と市教育委員会が主催する「子どもアドベンチャー2016」が8月17、18日に行われ、当資料館では昨年に引き続き、大好評企画「ミニ資料館を作ろう!」を行いました。

当日は、小学4年生から6年生までの5人が参加し、実物資料の中から自分で資料を選び、解説文を考え、写真を撮影し、パネルを作って展示するまでの作業を体験。最後に、調べたことについて発表しました。

参加した小学生は「知らないことを調べて、パネルにするまでの作業が楽しかった」「普段は見ることのできない資料館の裏側を知ることができて、とてもわくわくした」と感想を述べていました。



「ミニ資料館」の前で



海外各地で移住者・日系人のために発行されている邦字新聞より、気になるトピックをピックアップしてご紹介します。

2016年9月15日  
日系ジャーナル

# 祝 パラグアイ日本人移住80周年 眞子内親王殿下ご来訪

パラグアイ日本人移住80周年を記念する式典が、9月9日にパラグアイの首都アスンシオン近郊で、眞子内親王殿下、パラグアイのカルテス大統領ら国内外からおおよそ900人が出席して盛大に執り行われました。当資料館からも朝熊由美子館長が出席しました。式典の様様を日系ジャーナル(本社:パラグアイ・アスンシオン)が伝えています。

## 日系ジャーナルの紙面より

パラグアイ日本人移住80周年の記念式典が9日、ルケ市の南米サッカー連盟コメボールで開催された。日本を代表して眞子内親王殿下、パラグアイ政府からはオラシオ・カルテス大統領が出席された。(中略)

はじめに両国の国歌が斉唱されたあと、眞子さまがあいさつし、「80年に及ぶ日本人移住者と日系社会の歴史を改めて振り返り、長い旅を経て、日本から移住された方々が、数多くの困難を、勤勉に誠実に乗り越えてこられたことに、思いをはせております」と述べられた。そして「パラグアイの発展に貢献されると共に、日本パラグアイ両国の、友好の架け橋となつてこられた、移住者とその子孫の皆様に、心より敬意を表します」とお言葉を述べられた。

眞子さまがカルテス大統領と笑顔で握手を交わされると、会場からは大きな拍手が送られた。

続いて挨拶に立ったカルテス大統領は、1936年に11家族81人による日本人の移住が始まって以来80年、日系人は農業、商業、工業などの各分野で活躍しており、日本からも多くの企業が進出している、と述べ、日本政府の支援を受けて、イタプア県やアルトパラナ県も一大農業地帯として発展を遂げたことに感謝を示した。最後に「近年、パラグアイと日本の関係はより近く親しくなっており、パラグアイは官民あげて、日本人を心から歓迎します」と語った。(後略)



## 海外移住資料館周辺マップ



- 開館時間 10:00~18:00(入館は17:30まで)
- 休館日 月曜日(月曜日が祝祭日の場合は翌日)  
年末年始
- 入館料 無料

## JICA 横浜 で 同時 開催

期間  
2016.10.1(土)–2017.1.9(月祝)

パラグアイ移住80周年展  
—未来に続く国際協力のカタチ—



教師海外研修レポート展  
—先生たちが見て感じたブラジル2016—



## アクセス

### みなとみらい線

「馬車道」駅(4番出口)から徒歩約8分  
「みなとみらい」駅(クイーンズスクエア方面改札)から徒歩約15分

### JR線・市営地下鉄

「桜木町」駅から(汽車道→ワールドポーターズ→サークルウォーク)  
徒歩約15分